ば、小兒はこゝちよげにあそび居たり、おろしみれば、徑一寸ばかり、長四尺もやあらん蛇をつかみて、ふりまはし遊び居たり、蛇はとくに死にたるさまなり、思ふに人のみぬ間に小兒の血吸はんとて、柱より上り、鴨居よりつたひて、つぐらに入りつるを何ごゝろなく、急所をつかみたるなり、首より三四寸下は、急所にて、うてば忽に死ぬるなり、小兒はさる事しらねど、全く產土神の守護し給ひしならんと、たふとくぞおもほゆる、

〔日本書紀五崇神〕十年、倭迹迹日百襲姫命爲大物主神之妻、然其神常晝不見、而夜來矣、倭迹迹姫命語夫曰、君常晝不見者、分明不得視其尊顏、願暫留之、明旦仰欲觀美麗之威儀、大神對曰、言理灼然、吾明旦入汝櫛笥而居、願無驚吾形、爰倭迹迹姫命心裏密異之、待明以見櫛笥、遂有美麗小蛇、其長大如衣紐、則驚之叫啼、時大神有恥、忽化人形、謂其妻曰、汝不忍令羞吾、吾還令羞汝、仍踐大虛登于御諸山、〇下略

〔古事記中垂仁〕爾其御子、〇本牟智和氣御子一宿婚肥長比賣、故竊伺其美人者蛇也、卽見畏遁逃、爾其肥長比賣患、光海原自船追來、故益見畏、以自山多和此二字以音引越御船、逃上行也、

〔常陸風土記那賀郡〕茨城里自此以北高丘、名曰晡時臥之山、古老曰、有兄妹二人、兄名努賀毗古、妹名努賀毗咩、時妹在室、有人不知姓名、常就求婚、夜來晝去、遂成夫婦、一夕懷妊、至可產月、終生小蛇、明若無言、闇與母語、於是母伯驚奇、心挾神子、卽盛淨杯、設壇安置、一夜之間、已滿杯中、更易瓮而置之、亦滿瓮內、如此三四、不敢用器、母告子曰、量汝器宇、自知神子、我屬之勢、不可養長、宜從父所在、不合有此者、時子哀泣、拭面答曰、謹承母命、無敢所辭、然一身獨去、無人共去、望請矜副一小子、母曰、我家所有、母與伯父而已、是亦汝明所知、當無人可相從、爰子含恨、而事不吐之、臨決別時、不勝怒怨、欲震殺伯父、而昇天、時母驚動、取瓮投之、觸神子不得、昇因留此峯、所盛瓮甕、今存片岡之村、其子孫立社致祭、相續不絕、

〔日本靈異記中〕女人大虵所婚賴藥力得全命緣第卅一

蛇雜載